

「夏の歯型」

—初稿—

2025/4/19

雨森 れに

〈人物表〉

北岡 一輝 かずき

(26) スイカ農家

高田 彩音 あやね

(26) 一輝の恋人

北岡 大和 やまと

(50) 一輝の父親

1. 畑（昼）

大きな実が転がるスイカ畑。
夏の青空が広がっている。
倒れている北岡一輝（26）。
一輝目掛けてスイカを振り上げる女。逆光でシルエットしかわからない。
スイカの割れる音。暗転。

2. 北岡家・一輝の部屋（朝）

ゲームや漫画が整頓された和室。薄暗く、朝の予感が感じられる。
一輝が布団の上で目を覚ます。
汗だくの額を押さえ、安堵の息を漏らす。
上体を起こし、隣にあるローテーブルの上を見る。
ローテーブルの上には皿が2枚。スイカを食べた残骸がある。
一輝は面白くなさそうに頭を掻く。
うなじに、歯型の赤痣がある。

3. 北岡家・台所（朝）

古いタイプの台所。小窓が換気のために半分ほど開けられている。
一輝が三角コーナーにスイカの残骸を捨てる。
視線を窓の外に向ける。
そこには青々としたスイカ畑が広がっている。

4. 畑（朝）

一輝と北岡大和（50）がそれぞれ作業をしている。
一輝は痛んだ葉を摘みつつ、几帳面にスイカの角度を変えている。
汗が目に入り、痛そうな表情をする。
首にかけていたタオルを取り、髪をわしわしと拭く。
一輝のうなじに気付く大和。にやにやとしながら一輝に近づく。

大和 「元気ねえな」

一輝 「ただの寝不足」

大和 「ふーん。あーちゃん、激しかったんか」

一輝、驚いた顔。

大和は自分のうなじを指で叩いて見せる。

一輝は理解したようにタオルを首に戻す。

大和 「嫁と孫、いっぺんに来てもいいなあ」

一輝 「（思わず立ち上がる）そういうのやめろって！」

大和が楽しそうに去っていく。

一輝は不満そうな顔をしつつも、作業に戻る。

5. 農業用倉庫・外（昼）

休憩所かわりに使っている大きい倉庫。中では大和と従業員が談笑している。

日陰にあるベンチで、一輝が弁当を食べている。

一輝の目の前にはスイカ畑が広がっている。

背後から、凍らせたペットボトルが当てられる。

ふりむくと高田彩音（26）が微笑んでいる。

彩音 「昨日はごめんね」

一輝 「謝るぐらいならしなきゃいいのに」

彩音が、和樹の隣に座る。

彩音 「あんだけ拒否されたら帰るしかないんだけどね」

一輝 「え。お前、なんに対して謝ってんの？」

彩音 「途中だったのに帰ったこと」

一輝 「違うって。俺の事噛んだことは？」

彩音 「噛んだね。がぶっと」

一輝 「謝らないわけ？」

彩音、少し考えて、

彩音 「痛かったならごめん」

一輝 「なんだよ、それ」

彩音 「やめれないもん。好きなものは口に入れたいし」

彩音が煙草に火をつける。

一輝 「それも？」

彩音 「これはちよっと違う」

一輝 「わっかんねえ。興奮すんの？」

彩音 「興奮じゃないんだよなあ。なんていうか——満足？」

彩音が胸元をばたつかせて、風を入れようとする。

服の動きに合わせて、肌と下着が見える。

一輝の喉が上下する。

彩音 「心が満たされるっていうか——」

彩音、一輝の様子に気付き、胸元を大きく開ける。

彩音 「昨日も見たくせに」

一輝 「（目をそらし）見てねえよ！」

彩音は胸元を戻して、笑う。

彩音 「見てない、はないでしょ」

彩音が面白そうに笑い、煙草を吸う。

一輝は彩音の様子を見て、

一輝 「謝りにきてないだろ、お前」

諦めたように弁当を食べ始める。

ふたりは強い日差しを受ける畑を、ただ見ている。

倉庫の中から、大和の大きな笑い声がする。

彩音、ふっと笑い、煙草を消す。

彩音 「おじさん、変わらないね」

一輝 「デリカシーがなくて困ってんの」

彩音 「子供できたら、お乳あげるの見せろって言いそう」

一輝 「（咳き込む）なんでそんな話になんだよ」

彩音 「一輝が囁むの許してくれたらな！。すぐ嫁に行くのにな

！。そしたら子供もすぐなのになー」

一輝が目を見開く。

彩音は立ち上がって伸びをする。

一輝は彩音の体つきから目が離せない。

彩音 「好きだときゅってしたくなんない？」

一輝、彩音を後ろから抱きしめる。

一輝 「なる」

彩音 「んで、私は噛みたいってなる」

彩音が和樹の腕を甘噛みする。

一輝 「わっかんねえなあ」

一輝が彩音の首筋を噛む。

彩音 「痛っ」

一輝 「ほら痛いじゃん。なんで好きな奴、痛めつけんだよ」

彩音 「……ごめん」

一輝 「なんか怖いんだよ。噛んで、その次はって考えると」

彩音 「え？」

一輝 「人の味を覚えたクマとか、聞くじゃん」

彩音、驚いて、一輝に向き直る。

彩音 「まって。私、食べたいなんて言ってない」

一輝 「じゃあなんで噛むんだよ」

彩音 「だから。好きなものは口に入れたいの」

彩音が一輝を強く抱きしめる。力が入りすぎて体がこわばっている。

彩音 「これと一緒に。力いっぱいぎゅっとしたいのと、がぶっと噛みたいのは同じなの。わかってよ」

一輝は苦しそうな顔をし、ふりほどこうとする。

しかし、懸命に伝えようとする彩音の様子に抵抗をやめる。

一輝 「(苦しそうに) いたい」

彩音が離れる。

一輝は彩音から距離を取り、深く息をはく。

彩音 「ごめん、強くしすぎた？」

一輝は無言で彩音を見つめる。怒っても悲しんでもいない、無表情である。

彩音、沈黙に耐えきれず下を向く。

一輝 「痛いって言えば、やめれるんじゃない」

彩音が顔をあげる。

一輝 「途中でもやめてくれるなら……大丈夫」

一輝、彩音の頭に手を置く。

一輝 「殺したいわけじゃないってのはわかったから」

彩音 「冗談きついよ。痛いときはやめるつもりあるし」

一輝が彩音の頭をぐしゃりと撫でる。

一輝 「なら最初から加減しろって。でも、よかった」

彩音 「なにが」

一輝 「彩音が女王様か食人鬼かで悩んだ」

彩音 「なにそれ。ほんと、昔から大げさ。心配性」

彩音が一輝を小突く。

大和 「あーちゃん、来てたんか」

倉庫から大和が出てくる。手にはスイカとビニールシートを持っている。

彩音 「仕事休みだからきちゃった」

大和 「カズは幸せもんだよなあ。ほら、スイカ食ってけ」

彩音 「あ、それ私やる」

彩音がスイカを受け取る。

大和は地面にシートを敷く。

彩音がおおきく振りかぶってスイカを落とす。

シートの上で飛散するスイカ。

大和が嬉しそうに頷く。

大和 「この食い方でしたら完全にスイカ農家の嫁だよ。なあ？」

大和はひじで一輝をつつく。

彩音がスイカを齧りながら、にこにことする。

そして、一輝にもスイカを渡す。

一輝がおおきく一口、スイカに齧りつく。

彩音をみつめて、

一輝 「嫁、くる？」

彩音 「いいけど？」

彩音が菌型のついたスイカをみせつける。

一輝、困ったような笑顔で額を押さえる。

おわり